

波打ち際で女の右足を拾った。菊池老人の白髪を、晩夏の涼しい夕風が流した。

右足は波に撫でられていた。菊池はしゃがんでそれを拾った。足は腿から下の部分であった。菊池は寄せる波にもういちど右足を海水にひたして、こびりついた砂を払った。そしてふたたびその足を眺めたとき、菊池はようやくその美しさに気づいた。

右足はまごうことなき若い女の右足だった。これまで妻を娶ったことのない醜い老人の目にもそれは明らかだった。足は、豊かな重みがあった。丸まるとふとった女のそのように、過剰な脂肪がついているわけでもなければ、食事もままならない病人の足のように、骨にかろうじてわずかな肉がついているというわけでもなく、ゆったりとした肉がついていながらも引き締まっている足であった。その美しい肉づきによって生まれたふくらはぎと腿のカーヴを、白玉のように透いた肌がくるんでいた。右足は、ギリシヤの彫刻のようでもあり、丹念に造形された菓子のもようでもあった。

菊池はうつとりと右足を眺めていたが、ふとあたりを見回して、浜辺に女性はおろかひとり人間もないの不思議に思った。浜辺は海水浴場にはなっていないものの、夕焼けが美しいときには散策する人間がいることがあった。きつとこの右足は、浜辺を歩いていた女が知らないうちに落としてしまったのだろうと思ったが、持ち主の姿はすでに砂浜にはなかった。菊池はもういちどあたりを見回した。やはり誰もいない。夕暮れの眩しい光が斜めに浜辺を照らしているのみである。

菊池は赤子を盗むように、だいじに右足を抱えて足早に砂浜を去って行った。

菊池老人はこれまで妻を娶ったことがないが、女同居したことも、女と一緒にねむったこともなかった。これは菊池の性格が濁世を厭い情欲を避ける仙人然としたものだったからではなく、単に彼の容貌が醜かったからである。彼は生まれつきの斜視で、そのうえ顔かたちも周囲の人間と比べて悪かった。若いころに菊池のまわりにいた同年代の女たちは、菊池を敢えて避けるような振る舞いを見せた。自らの容貌を気にして滅多に異性に近づくことをしなかったが、女のほうも決して菊池のほうへ近づくことをしなかったのである。浜を一望できる場所に居を構える菊池老人は、時々砂浜で接吻する若い男女を目撃することがあった。その輝かしい光景を凝視しながら、菊池はあまりにも醜い顔を皺んだ両手で触った。「ああ、もしもおれの顔が、いっそのこと斜視なぞは残ってもかまわないが、そのほかの顔、眉、鼻、頬、口、顎、こいつらがもつと整っていけば、女の温もりを感じることができただろうに！」

美への渴望、叶うことのない美しさに対する欲望を、菊池は芸術で以て晴らそうとした。菊池は若い時分から水彩画を趣味としていた。菊池の父親は石油会社の重役で、財産は豊かにあったから、醜くとも愛おしい我が息子にせめて一芸を身につけさせようと、一流の画家のもとにつかせて絵の描き方を学ばせた。幸いにも菊池にも絵の才があった。菊池は師が驚くほど絵の腕をあげていき、都市の展覧会にその作品が出品されるまでになった。まもなく父親の会社がその後倒産したせいで、父の財産を支えに水彩画家として大成する道は絶たれたが、インク会社に勤めながら、休日には遠出をして写生をすることを楽しみにしていた。美しい風景や草花の前に座り、ゆつくりと筆に水を含めながら、対象の美を盗み取る。

生まれながらに美を奪われた菊池にとつて、絵を描くという行為は復讐に似た恍惚をもたらすものだった。だがそれでも、帰りの列車で菊池の脳裏をよぎるのは、味わうことを許されなかった甘美な青春であり、いつか窓から眺めた接吻であった。

ちようど陽が没しようとするころ、菊池老人は家に辿り着いた。急いで帰ったせいで、菊池の膝は玄関に着くなり崩れた。菊池は抱えていた右足を床に置いた。肌についた海水は乾きかかっていたが、それでも白い肌はたつぷりと水分を含んでいるようなやわらかい質感を持っていた。菊池はようやく腰を上げると、風呂に湯を溜め始めた。蛇口から勢いよく流れ出る湯を見ながら、ふと菊池は、あの美しい右足がいつか乾燥してひび割れてしまふのではないかという恐怖を感じた。菊池は大きな水桶に水を張り、その中に拾った右足を沈めた。右足はとぷんと音を立ててかかとから水に浸かった。

湯が溜め終え、脱衣場で服を脱ごうとしたとき、菊池老人は右足も一緒に風呂場に連れて行くかと思つた。右足は水桶の上でゆつくりと回っていた。その静かな回転を眺めながら、菊池は首を横に振つた。

「あの美しい右足に、皺まみれで汚れたじじいの裸を見せるわけにはいかない。ましてや一緒に風呂に入ろうなど」

水桶を脱衣場の入り口に置いたまま、菊池老人は熱い湯に浸かった。だがいつものように落ち着いた心でいられた。湯が熱すぎるからだろう、いやそれが原因ではない。風呂場の外に裸の若い女がいるような気がしてならない。おれがいま湯に浸かっているように女も一糸纏わぬ姿になつて、その白い肌を湯で流している、そ

んな感覚。

落ち着かなくなり、菊池はいつもよりも早く湯船からあがった。あわただしく身体を拭いた。脱衣場の扉を開けようとしたとき、老人はためらつた。女がまだ着替えを終えていなかったらどうする。斜視の醜いじじいに裸体を見られてもしたら、女は大きな恥辱を味わうに違いない。いや、いや。醜いおれが若い女の裸体を拝むなど滅多にないことだ。音がしないよう、静かに戸を開けさえすればいいんだ。菊池老人の首筋を生ぬるい汗が流つた。菊池はたまらなくなつて、わずかに戸を開けた。目を押し当てた。

女の裸体は無かつた。水桶の中でくると右足が回っているだけである。

眩しい妄想から引き戻され、菊池老人は恥ずかしさを感じながら、いちばん新しいタオルで水桶の中にあつた右足を拭いた。やはり右足は右足だった。しかしどうしても菊池には、この右足が単なる身体の一部位に感じられなかつた。一部位というよりは、この右足そのものがひとりの女性の身体全体であるように感じられたのである。だから菊池は、夕餉の味噌汁を煮、飯を炊いているあいだ、水浴を終えた右足を裸のまま放つておくことができなかつた。菊池はもう紺色の手ぬぐいを出して、優しく右足を包んだ。足首より下を包まれたその姿は、まさに紺色の着物を身に纏つた女だった。白い肌はいっそう映えた。味噌汁の実の大根を切っているときも、炊き上がった飯を椀に盛っているときも、菊池は右足の美しさが気になつてしようがなかつた。飯を食っているときもそうである。菊池は右足を食卓の反対側に置いて、右足と向かい合つて飯を食つた。菊池は面を上げて右足を

直視することができずに、ずっと下ばかりを見ていた。時々ちらと右足のほうを見た。菊池老人はこの齡になつて正しい箸の持ち方も身につけていなかったが、まるで着物を着た白い肌の女がほおづえをついて自分の食事を眺めているような気がして、むかし母親に口うるさく言われた箸の持ち方をなんとか思い出しながら、形の揃わない大根の欠片を口に運んだ。

食事もずいぶん気を遣つたが、それ以上に気を遣つたのが睡眠であつた。菊池老人の就寝は早い。飯を食い、ラジオを聴きながら一時間ほど休むと、すぐに布団に入つてしまふ。とくにやらなければならない作業もない。やることがないのだから、眠るより他ない。

だがその晩は違つた。美しい右足がいた。いつもならすでに就寝の時刻で、菊池は押し入れから布団を引つ張り出していたが、そのときも菊池は悩んでいた。

「右足をどうするか」

布団を敷き終え、菊池は右足を見た。右足は肘掛椅子の上に置いてあつた。右足と添い寝をする、そんな考えが菊池の心に生まれた。

「いくら晩夏とはいえ、そのまま椅子の上に放置したまま夜を過ごさせるのはわるい。だったらおれの布団にいられたほうが、右足のためにもいいだろう」

ほんとうはそんなことを考えていなかったのだ。ただの口実に過ぎなかつた。

右足のためという大義名分に背中を押され、菊池老人は椅子の上の右足を布団に運んだ。菊池は自分の身体を布団にすべらせると、右足をそうつと、生まれたての赤子を横たえるように布団の中に入れた。熱が伝導するよ

見つめ、ほうつとあまい息を吐くようだった。たまらなくなつた菊池は天井から垂れた紐を引っ張つて灯りを消し、暗闇の中で必死に眠りに落ちようと試みた。

「決して自分は、やましい思いをいだいてゐるわけじゃないんだ。やむをえない、やむをえないことなんだ」

菊池老人はまぶたをぎゅつと閉じて、開けまい開けまいと思つた。もしも目を開けて、暗闇の中に沈む白い肌を一目でも見てしまつたら、おれはもう、道徳的な人間ではいられない！

壁掛け時計の微かな音が耳に入つてきて、菊池は我に返つた。

「おれはなんていうことをしていたんだ！」

菊池は慌てて寢室の明かりを点け、目の前で身を横たえる右足を布団から出した。

「ああ、おれはなんていうことを。おれごとき、おれごとき醜男、それも艶も張りもない汚れた肌の老人が、こんなに美しいものとねむるなんて、おこがましい。おれにそんな資格があるものか。誰が望むだろう、こんな男と寝るだなんて、誰も望むまい、望むまい」

菊池老人は自分の顔をひっぱたきたいと思つた。自分がおそろしいことをしていたのだと感した。菊池はさきほどまで右足を置いていた肘掛椅子にもういちど置きなおした。そして自らは独りで布団に入つた。

すぐにまた布団から出た。「部屋の隅の肘掛椅子なんか置かれても、なんもおもしろくないだろう」

菊池は寢室の窓の近くに肘掛椅子を移した。この窓からは砂浜の全景を見下ろすことができた。かつて菊池が、接吻する男女を羨んだのもこの窓の前である。今夜は美しい月夜だった。闇を溶かした海原の向こうにぽっかり

と満月が浮かんでいる。雲はわずかである。窓を開ければ、涼しい夜風が潮騒を伴つて入つてきた。菊池はそこに肘掛椅子を置いて満足した。きつとここなら右足もよろこんでくれるだろう。

菊池老人はこんどこそゆつくり布団に入つた。目を閉じる前に肘掛椅子の方を見た。手すりの間から右足が見える。ちょうど肘掛椅子の直線上に満月が重なつていて、白い右足は月に映えて、淡い金色に染まつていた。

その晩、菊池老人は夢を見た。夢と言つても、我々が普段見るような夢ではなく、まるで菊池の過去の記憶をなぞつてゐるような夢だった。菊池が夢で見たのは遠い昔の話である。

菊池に妻がいないことは、冒頭から繰り返し書いてきたことである。情交や接吻といった世の男の多くが経験するであろうことの多くを、菊池はいつさい経験したことがない。ただ、まったく女の肌に触れたことがない、というわけではない。

あれは十六の齡であつたか。父親の勧めで幼少期から通つていた画塾に少女がやつてきた。菊池と同じように何処の大企業の令嬢で、黒髪を短く切り、きりつと細い目で、まるで傍から見れば青年に見紛うような美しい少女だった。齡は菊池よりふたつ上だった。元來物静かな性だった菊池は自分から彼女に話しかけることもなかつたし、少女のほうも言葉を発しなかつた。しかし彼女の持つ一種妖しげな風貌は、菊池も気になるところだった。恋心も抱いていたかもしれない。

とくに菊池が魅了されたのは少女の足である。女はよく物語で読むような、足の隠れる着物を纏つた日本婦人ではなく、足のくつきりと見えるセーラー服を着ていた。

少女の足は美しかった。墨をたつぷりと含んだ小筆が半紙の上をやわらかくすべつていくときの曲線が、少女のふくらはぎにはあつた。ふくらはぎをのぼつた線は、目立つた波こそうたないものの、やわらかさを留めたままにスカートの中に消えていた。菊池は昼間に、画塾で絵筆を動かす彼女の足を横目で観察し、目に焼きつけた美を夜中に鉛筆で描いた。もちろん、彼の優れた美術の腕を以てしても、實際の美を描ききることは出来なかつたが。

菊池の、少女の足に対する欲望は、膨張こそすれ発散されることはなかつた。つねにその欲望は内側で処理せざるをえなかつた。彼自身、それを仕方のないことだとわかつていた。醜い自分が少女と結ばれることなど、最初から考えていなかった。

少女が画塾に来てから一年が経つたころ、画塾の塾長は写生の修行も兼ねて河津の温泉郷への遠足を計画した。菊池も少女も、その遠足に参加した。山はちょうど緑の盛りで、豊かな草木が山々を青く染めていた。塾長は散策しながら、現れた名勝や可憐な草花を題材にスケッチをしてみるように生徒に言つた。生徒たちははしがんで、各々鉛筆で対象を写生した。菊池は名も知らない小さな花を描きながら、すぐ隣で同じように絵を描いている少女の、白く豊かな腿をきつと見た。そして普段は椅子に座つてゐるせいで見ることでできない腿の裏がわに、小さいほくろがあるのを見た。

六ヶ所で写生を行つたあと、塾長は温泉街が並ぶところで、よし、ここらで解散し一時間ほど湯につかうと言つた。このとき菊池は狼狽した。着替えを持ってきていなかったのである。あとで聞いた話によると、前回の授業の終わりの時に湯に浸かる話をしており、塾長は着

替えを忘れぬよう塾生に言っておいたのだが、たまたまその日に菊池は用事があったて画塾を早退したため、この話を聞いていなかったのだ。長く歩いたせいで菊池の着ているシャツには汗が浸み込んでいた。湯に入った後に汗で冷たくなったシャツを再び着るわけにはいかなかった。菊池は温泉に浸かるのを諦め、ちようどそこにあつた足湯に入ることにした。

他の塾生は賑やかに湯屋ののれんをくぐっていった。菊池はその様を羨ましげに眺めながら、足を湯に浸した。暇をつぶすべく、今日自分が描いた写生画を眺めてはじめた。

三枚目の絵を見つめているとき、はじめて菊池は自分の隣に人がいることに気がついた。それはあの少女であつた。

「わたし、温泉に入るなんて聞いていなかったの。わたしの家はいつも門限が早いから、最後まで塾にいられないの。先生も事情は知っているんだから、帰るときに服の件を言ってくればよかったのに」

菊池君も同じ？ と訊かれて、菊池はうなずいた。

「菊池君って、絵、上手ね」

少女は菊池の膝に乗っている画用紙を見た。絵は崖から眺めた河津川のスケッチであつた。朱色の欄干の橋を貫き、そして河津という町そのものを、川は貫いていた。菊池は少女の褒め言葉に何も返すことができなかつた。

少女は口元に手を当てて、小さく笑つた。

「そんなに緊張しなくていいのよ、もう一年も同じ画塾にいらんだから」

菊池は誤魔化すように笑つた。そのとき彼は、少女の裸足が湯に浸かっているのに気づいた。踝のすこし上のあたりまで、清んだ温い液体が覆つていた。菊池は美し

いと思つた。湯の中で、彼女の足の美が水彩絵の具のようにひろがっているように感じた。

「菊池君」

名前を呼ばれて、菊池はふっと美への没入から引き戻された。

「菊池君にとつて、美しいと感じるものは何？」
突然の問いかけに菊池は思わず、え、と漏らした。

「わたしはね、紫陽花の花が好き。夜に雨が降つて、朝になつて雨が止んだあと、花びらに水滴がつくでしょう、わたしそれがほんとうに好きなの。ほら、真珠の玉を散らしたみたいで」

「うん、僕も紫陽花は綺麗だと思つ」

菊池はつつかえながら、もつとも無難な返答を絞り出した。だが菊池にとつて、もはや草花の美しさなどは頭になかつた。頭にあるのは、湯の中で揺らめく少女の足であつた。

「菊池君は、美しいと思つものはない？」

菊池は狼狽した。通り過ぎたと思つた質問が、また戻つてきたと思つた。菊池はまた無難に、ちようど先ほどスケッチした草花の名をあげようと思つた。だがそれは憚られた。せつかく彼女が自身の価値観を披露してくれたにも関わらず、自分は本心ではないでつちあげの好みを言うことは失礼だと感じた。しかし、彼女が自分にとつての美を肯定してくれるとは思えなかつた。そのことの所為で、少女が自分を嫌い、軽蔑するのではないかと思つた。菊池は本心を言うべき、建前を言うべきか悩んだ。背に腹は代えられないと、「桜の花が美しいと思つ」と言おうと思つたその刹那、再び菊池の視界に少女の右足が映つた。彼が美しいと思つた、あの白いふくらはぎと豊かな腿とが、一度に飛び込んできた。

菊池はすべるように

「女の足が美しい」

と言つた。恐怖のあまり、菊池は少女の顔を見ることができなかつた。本心を打ち明けた満足感を遙かに超える後悔の念が渦巻いた。嫌われたに違いない。呆れているに違いない。菊池はぐらぐらと揺れる視線を、ただ膝の上の画用紙に注いだ。

「ほら」

少女の声が聞こえた。

「ほら」

菊池が面を上げると、腰掛に先ほどまで湯に浸かつていた少女の足が乗つていた。

「ほら、足」

少女はすこし恥じらいながら、菊池に向かって自分の右足を差し出した。右足はついさつきまで湯の中であつたこともあり、ほのかに湯気が出ていた。そしてもとより白く美しい肌は、水を含んでいつそうやわらかな色合いになつていた。人間の肌というよりは、洋画家が描く女性の肌に似ているように感じるほど、差し出された少女の足は美を突抜けていた。菊池は突然目の前に現れた景色に思わず瞬きをした。瞬きをして、尚も眼前から消え失せない右足を不思議に思つたほどだ。触れたい。そうも思つた。そんな菊池の願望を見抜いたかのように、少女は仄紅い足の指を動かして誘つた。少女は微笑んでいた。それで菊池は確信した。

菊池は差し出された右足を、人差し指でそつと触れた。「これだ！」菊池は心の中で叫んだ。少女の肌はしつとりと濡れてやわらかかつた。菊池は中指、親指、薬指、小指と、順に触れていった。そして最後は手の平で、そつと少女の足を撫でた。それは大理石の如く、そして

絹の如く感じた。菊池は踝からふくらはぎのカーヴを経て、腿のほうへと手をやった。上がつていきながら少女のほうをちらと見て、彼女に抵抗の表情が無いのを確認した。菊池は腿に至ると、その豊かな肉を、そとつまんだ。

この時、菊池がどれほど快楽をおぼえたか。風呂屋の玄関から湯上りの画塾生の声が聞こえるまで、菊池は少女の足を丹念に撫でた。福に至るとい言葉の真相を、菊池は理解したに違いない。菊池は決して差し出された右足以外に触れようとはしなかった。彼の手は少女の腿より先に進むことはなかった。彼にとつて美とは少女の腿より下の部位であり、その上は邪な領域であった。

夢が覚める直前、菊池老人は足を撫でられた少女が目細めて微笑するのを見た。

普段はまだ眠りの中にあるような時刻に、菊池老人は目を覚ました。まぶたに涼しい空気が触れた。そとと視線を窓の方にやった。右足は椅子に腰をかけ、薄明の海岸をゆったりと眺めていた。菊池は上半身だけ起こしたまま、しばらくうつとりとそれを見つめていた。また夢から覚めて間もない。菊池には夢で見た遠い昔の記憶がはつきりと残っていた。遙かな記憶が、目の前の光景とぴったりと重なったように感じた。この時菊池の皺んだ皮膚が微かに震えたのは、早朝の涼しい気温のせいではないだろう。

「おはよう、よく眠れたかい。今朝はずいぶん涼しいね、毛布をかけておけばよかつたか。今、湯を沸かすから」

菊池は弱った腰を奮い立たせて、右足が浸かる湯を沸かせた。火傷しないよう注意して沸かせた温い湯に右足を浸かせたとき、彼はあの日の少女のことを思った。

朝餉の味噌汁をつくろうと台所に向かった足を止めて振り返り、右足が気づかないほどの優しさで、そとと白い肌をつついてみた。ああ。その触感、足湯の少女の足と寸分も違わなかった。今日の前にある右足は、あの少女のものではないかと思つたほどである。だが菊池の家は、かつて画塾に通つていたころの家からはだいぶ離れている。そもそも、自分が彼女と交流したのは、もう何十年も前のことで、とうの彼女も今頃は自分と同じくらの齢になつてに違いない。右足が、あの少女のものであるはずがないのだ。しかしそれにしても。

昨晚のように右足と向かい合つて朝餉を食べた。煮豆を口に運んでいると、ふと、この右足を交番に連れて行くべきではないかという気持ちが生まれてきた。

「そうだ、そもそもこの右足は他人様の右足であつて、俺の女房でも俺の娘でもない。いくら海岸に落ちていたからとはいえ、これを交番に届け出すにしているのは誘拐ではないだろうか」

だが菊池の心は抵抗していた。できることならば右足を自分のものにして、永く世話をしあげたい。そしてその美しさをずっと眺めていたい。菊池は迷つた。それで、目の前の右足に

「おまえはどうしたい」

と尋ねた。右足はどうしたらよいかわからないらしく、すこしくずれた微笑みを浮かべた。菊池はさらにわからなくなつた。しばらく悩んで、ようやく辿り着いた最適解は

「今日もう一日右足を預かつて、明日になつたら朝一番に交番に届けよう。俺は後悔が残らないように、今日一日は精一杯右足の世話をしよう」

というものだった。菊池は胸の霧がすつと晴れたように感じたし、それを聞いた右足もほつと笑つて見せた。

食事を済ませ、器をすすいでから、食卓の前の右足に「海に行こうか」

と言つた。窓ガラスの外では、夜は黒く揺らいでいた水面が、すっかり青く染め上げられ、時々白い波が立つて浜に浸みっていた。右足はその景色を見て、黙つてうなずいた。

菊池は右足に真綿のタオルを巻いてやった。せつかくの白い肌が、日に焼かれてしまわないようにするためである。そして、とつておきの茶葉で緑茶を淹れ、氷とともに水筒に注いだ。日は眩いばかりに玄関へ刺さつていた。老人は衣をまとつた右足を携えて、海岸への下り坂を歩いて行つた。

「今日もずいぶん暑いですね」

右足が言うと、

「そうですね。今日は格別の夏日和というところでしょうな」

と返した。

「この辺りに住んでいるのかい？」

「いや、もっと東のほうの、工場が多いところです。夏場は工場の熱で茹だつてしまいますから、夏の休暇中は別荘のあるこの海岸にいるのです」

角がすり減つた狭い石段は、草がむし、鋭利に伸びた葉の先端が、浜辺へ下つていく老人と右足に向けられていた。勾配は急である。都市生活者であればとても登れないような角度だが、菊池老人は足元も見ずに下つていった。

海辺には既に何人かの先客がいた。遠くの岩場では親子が潮たまりを散策し、砂浜では白いパラソルの下で婦

人が文庫本を読んでいた。何度か老人は彼女と話をしたことがあった。老人が会釈すると、婦人は本を膝に置いて、小さく頭を下げた。

少し歩くと、松の木が群れて木陰を作っていた。老人はそこに腰を下ろした。床は砂ではなく豊かな土で、敷物のようにやわらかい草が覆っていた。老人が腰を下ろすと、右足はその隣に座り、白い着物の裾をそつと地に寝かせた。

「松の木の陰はずいぶん涼しいですね」

「ああ、よくおれはこの下に来るんだ。年寄りに太陽の光は堪えるから。この辺りではこの松の木の陰がいちばん波打ち際に近いし浜辺を見通せる」

それを聞くと女は、先ほど自分たちが歩いてきたほうへ首を向けた。砂浜は白い背中を曲げ、まるで海に向けて礼をするように見えた。女が浜辺を眺めると、白いうなじが菊池のほうを向いた。女の首もまた、砂浜のようだった。流れるように白肌が黒髪から白い着物へ消えていつているのを、菊池は美しいと思った。

若い時に京都へ行ったとき、坂道の上の方から若い芸妓が集まって下りてくるのを見た。その芸妓たちが通り過ぎるとき、彼女らのうなじだけ白粉が塗られていないのを見つけて気になったのを覚えていた。それはたまたまのものではなくて、塗り残すことで白粉と地肌とで文様を成していた。後になって、あれは芸妓の化粧の一種だということを知ったが、菊池はあの塗り残しがどうも気に入らなかつた。お白粉をすべて塗ってしまうほうが、隙のない美しさとして完成するのは、雪がそこだけ剥けているというべきか、水がそこだけ枯れているというべきか、老人には化粧と女の両方に対する冒流のように思えてならなかつた。

それに比べて、海岸を眺める女の首の白さは、頂点で結ばれていた。もはや一針を刺すことも許されない緊張が、そのうなじに潜んでいると思つた。

女が水筒に手を伸ばすと、菊池は先に水筒を持って、小さな腕に緑茶を注いでやった。女は申し訳なさそうにした。「もう一杯いかがですか」菊池が言うのと、「すみません」と言つて茶を受けた。そうして菊池自身も、腕の中ほどまでついで飲んだ。

「ちよつと波のところまで行つてきます」

女はそう言つて立ち上がると、波打ち際のほうへと歩いて行つた。そうして裾を上げ、おそろおそろ波に右足を浸した。「つめたいっ」という声が、離れた菊池老人のところにも届いた。女は左足も水につけると、魚がひれを操るように足を浅瀬に泳がせ、しばらくすると松の木陰の老人に向けて、屈託ない笑顔を見せるのだった。老人は遠くからそれを眺めていた。にこやかに手を振ると、女も手を振り返した。そうすると女は、再び水と砂との戯れに戻つていった。菊池老人は夢に見たおぼろげな景色が、今まさに現実のものとして眼前に出現しているように感じた。

それから老人は、しばらくうたた寝をした。松の枝からこぼれる日差しが、ひらけた砂浜の直射日光に比べ、おだやかで和やかであつたからである。水遊びから帰つた女は、「おじいさん」と老人の背中を少し揺らした。

「そろそろ夕暮れになりますから、帰りませんか」

「ああ、すまない。しばらく寝てしまつていたよ。

水遊びは、楽しかつたかい」

「はい、こうして海で楽しむのも、今年は最後でし

よう。そろそろくらげも出る季節ですし、だんだん涼しくなつてきますから」

「夏ももう終わりだ」

なみなみと注がれた青い海水の彼方に、橙色の液体が少しずつ溶け込んでいた。時々坂道で振り返りながら、老人と女は元来た道を辿つて家に帰つていった。

菊池老人は、昨日と同じように右足を湯桶で洗い、丹念にタオルで洗つた。海辺にいたときはまるで一人の女のように見えていた右足は、玄關に着いた途端にもとの「右足」に戻り、老人はその足に付着した水滴をひとつひとつぬぐつていった。

飯を炊き、飯を食う。茶碗を持つ老人の向かいにはやはり右足があつたが、昨日ほどの緊張は感じなかつた。就寝時刻になるまでは早かつた。

寝る前に、菊池は右足をまた窓辺の肘掛椅子の上に乗せ、そこに毛布を掛けた。夕食の片付けをしているときに思いがけず驟雨が降つて、その残りがまだ微かにガラスについていた。菊池は布団にもぐつて、早く寝てしまおうと思つた。また色々思い巡らすと、今度はいよいよ寝むれなくなるような気がしたからである。力まないよう、すこし緩めに瞼を閉じて、眠気が寄せてくるのを待った。そしてその試みは成功した。老人はゆつたりと眠りに落ちかけていた。

肘掛椅子がぐるりと回るのを感じて、ほとんど寝むりかかつていた菊池老人はすぐさま引き戻された肘掛に手を置いて、女がこちらを見下ろしていた。やがて立ち上がつて、老人の布団の前に膝をつくくと、

ささやくように「起こしてしまいましたか」と言った。老人は平静を装うとしたが、「いいや」と首を振るのが早かったことに自分でも気が付いた。菊池の目の前に女の膝があつて、着物から仄かに香りがした。老人は起き上がろうとしたが、

「横になつたままで結構ですよ」

と女が言ったのでそのままの姿勢でいた。

「肘掛椅子では寝むれないかい」

と老人は尋ねた。

「雨が強くなつて海が見えませんの。さつきまでは止んでいたのに、また降り始めたみたいです。結構な強さですよ」

女が体をすこし動かすと、車軸を押し流す雨が窓に叩きつけていた。そうして初めて、雨が屋根を叩く音がしていることを知った。

「どこかで会つたことがあるかい」

菊池は女のほうをちらと見た。

「おじいさんですか」

「ああ。どこかで会つたような気がするのだが。それも、ずっと昔に」

「ずっと昔のことなら、わかりません。時間が経てば、人の顔も身長も声も変わつてしまうものですか」

すると、女は正座の脚をすこし浮かせて、踏んでいた着物の裾を畳に放ると、両足を寝かせて、菊池老人の前に差し出して見せた。老人の顔の前に白い右足が横たわつた。その右足に見覚えがあつた。そしてそれが、かつて河津の足湯で差し出された少女の足だとわかるのに時間はかからなかつた。老人はあの時のように、人差し指の腹でそうと触れた。

そして肌に触れた指を、ふくらはぎからくるぶしの辺りへと、そうとなぞつて下ろした。皮膚は磨き上げられていた。指の動きを妨げるものがまるでなかつた。今度は五本指で足を撫でた。波が再び押し寄せて、余韻とともに消えた。

女は自分の足を、すべて老人に任せているようだった。老人の顔は見えないで、枕元の、使い古されたラジオのアンテナをぼんやり見つめていた。唇の端がほんのすこし上がつていた。

菊池は女の足を辿つていたが、同時に記憶も辿つていた。暗がりの中でおぼろげな記憶は鮮やかに映し出され、女の背後から足湯の湯気が立ち上り、湯屋が立ち並んだ。親指、人差し指、中指、薬指、小指、そしてふくらはぎの曲線をなぞり、太腿に差し掛かつたところで老人の手は足の指に帰ってくる。右手で撫でたあとは左手で、そして両手で撫でた。触つた。なぞつた。

菊池はそろそろやめようと思つた。かつて足湯でやつたことのすべてをやり終えて、すでに彼の欲望のほとんどは叶えられていた。手をそつと退けて、

「ありがとう、もう、十分だ」

そう言つて元通り布団の中に戻ろうとした。すると態勢を横にしようとした菊池の上半身を、女の両腕が抑えた。寝る姿勢になりかけた彼を起こした。

「まだやり残していることがあるでしょう?」

女は言った。

「あのときもそうだったでしょう、菊池君はやっぱりそうなのよ。いつも早めに自分を止めて、その一歩手前のところで終わりにしてしまふ。それでいて、あとから後悔するの。あとすこしだったのになつて」

動けないでいる菊池の顔の前に、女は右足をさらに出してみせた。菊池と右足との距離は、こぶし一個分ほどしかなかつた。

「いいのよ」

菊池は右足のふくらはぎに接吻した。見上げると、やはり女は微笑んでいた。

翌日、菊池老人は近所の交番に向かつた。夜中のうちに溜め込んだ雨を降らせきつて、からつとした晴天だったが、気温は秋のそれになつていた。交番は海水浴場の近くにある。夏場は何かと騒ぎや遺失物が多くなりがちになる。通報が来たらすぐに駆け付けられる距離だつた。しかしそのシーズンも過ぎた今、警官たちの仕事はほとんどなかつた。もう作業もなくなつて、麻雀の話に花を咲かせていた。

老人が交番の戸を叩くと、中にいた警官は驚いた。「どうされましたか」

何か事件が起きたのかと思ひ、二人の拍動は高まつた。

「その海岸で、右足を拾つたのですが」

老人は手提げカバンから右足を出してカウンタに置いた。

「右足ですか! 一昨日遺失届が来たんですよ。海水浴をしていたら誤つて落としてしまったらしくて、もしかしたらその方のものかもしれない」

「ああ、そうですか。よかつた」

菊池老人は簡単な書類を書いて、右足を警官に引き渡した。

「ずいぶん心配していたんですよ、その方。毎日のように右足が届いていないかを確認しにいらつしや

るんです」

「大体同じ時間にね。そういえば、もうそろそろその時間になるか」

書類を確認しながら、警官たちは話した。老人はその話を聞きながら、帰ろうか帰らまいか悩んでいた。それは遺失物を届けた者としての悩みではなかった。足の持ち主がどんな人間なのかを知るべきか、知らずにいるか、といった問題だった。菊池は書類に目を通す警官の姿を眺めた。

そのとき、交番の扉が開き、取り付けられたベルの音が鳴った。警官は入ってきた人間を見ると、立ち上がった

「ああ、ちょうどいいところにいらっしやいましたね！ 右足が届いたんですよ。たった今です」

「ほら、言った通りでしょう？ 時間どおりです」
警官に言われ、菊池は思わず扉のほうを振り返った。

それから一週間が経った頃、菊池老人は散歩の途中、波打ち際に右足が落ちていたのを見つけた。老人の白髪を、秋の涼しい夕風が流した。

右足は波に撫でられていた。菊池はしゃがんでそれを拾った。足は腿から下の部分であった。菊池は寄せる波にもういちど右足を海水にひたして、こびりついた砂を払った。そしてふたたびその足を眺めたとき、菊池はその足が美しいことに気が付いた。

老人は右足を元あったように置き直して、まるで何も見なかったかのように歩き出した。夏のおもかげが消えて、もう砂浜で戯れる人間はいなかった。観光施設が多い海辺の町は、長い休暇の季節に入る。海もまぶしかつ

た青色を深く閉じ込めて、ただ夕焼けに染められるがままでいる。

翌日散歩に出ると、落ちていた右足はなくなっていた。おそらくは波にさらわれて流されたのだろうが、老人は安堵した。